

KCELS 発足25周年記念 英語学部門 最優秀論文

動詞の意味構造における『被影響』の概念の役割について

今 泉 志奈子

(大阪大学大学院言語文化研究科助手)

## Summary

### On the Notion of "Affectedness" in the Semantic Structures of Verbs

Shinako IMAIZUMI

In this paper, I have examined the role of the notion of 'affectedness' in the semantic structures of Japanese verbs by assuming lexical representations which involve predicate decomposition (i.e., Lexical Conceptual Structure, hereafter LCS).

Specifically, I have focused attention on the behavior of three verbs which can be found in the 'affectee' subject constructions: *azukar* ('receive'), *osowar* ('be taught') and *mitukar* ('be found'). These verbs are all characterized by the suffixation of *-ar*, which is normally regarded as intransitivizing the (di)transitive counterparts as in the case of *sime/simar* ('close') or *tutae/tutawar* ('notify'/'be notified').

Nevertheless, *azukar* and *osowar* present a sharp contrast with *simar* and *tutawar* in several respects. (i) They typically select recipient rather than theme as their grammatical subjects. (ii) Even after the suffixation of *-ar*, they seem to retain the transitive structures in that accusative-marked objects co-occur. Moreover, (iii) such accusative-marked objects cannot undergo syntactic passivization. Owing to these properties, *azukar* and *osowar* have been treated as more or less idiosyncratic in nature in the previous studies. Instead, regarding the suffixation of *-ar* as a sort of voice alternation, I have proposed to offer a unified treatment for these verbs by introducing the semantic predicate AFFECTED which specifies the relationship between the event and the individual affected by that event (i.e., 'affectee') into the LCS representations of these verbs.

Based on this assumption, I have shown that the predicate AFFECTED adequately predicts and explains the characteristic behavior (i.e., (i)–(iii) above) of the recipient subject constructions which involves *azukar* and *osowar*. Next, I have argued that this semantic function also plays a crucial role in the LCS of *mitukar*. In particular, I have suggested that *mitukar* should be classified into two subtypes with respects to their argument-taking properties. Such classification well reflects the semantic similarity between the unaccusative verb (i.e., one-place predicate) and the transitive verb with non-agentive subject (i.e., two-place predicate), something which has been rather neglected in previous studies. Finally, I have mentioned the further possibilities of extending the analysis presented here towards a wider range of voice alternation phenomena, including the derivation of the indirect passive and the mechanism of its adversative reading.

To sum up, the semantic predicate AFFECTED is regarded as the function to specify 'inherently passive' relationship between 'affectee' and the affecting event, which helps to account for the reason why the accusative objects of the verbs like *azukar* or *osowar* prohibits syntactic passivization. Namely, the verb whose semantic structures is characterized by its inherently passive relationship need not undergo further passivization.

## 1 はじめに

日本語には、特定の接辞の付加により規則的な自他交替を示す動詞が多く観察される。そのなかで次の(1), (2)のような例における接辞 *-ar* は、特に自動詞をマークするものとして分析される。<sup>1</sup>

- (1) a. 健が窓を閉めた。  
b. 窓が閉まった。
- (2) a. 教授が学生に試験の結果を伝えた。  
b. 試験の結果が学生に伝わった。

(1a) の「閉める」は2項動詞、(2a) の「伝える」は3項動詞であるが、接辞 *-ar* が付加された(1b), (2b) では結合価が1つずつ減少し、動作主役割を担う主語(=健、教授)があらわれなくなる。この点で(1b), (2b) の自動詞用法は、(3) のいわゆる受動文と同じような効果をもつ。

- (3) a. 窓が(健によって)閉められた。  
b. 試験の結果が(教授によって)学生に伝えられた。

そこで、本稿ではこういった接辞 *-ar* の付加による動詞の自他交替を態交替現象の一種として捉えることにより、<sup>2</sup> そこにはたらく一般法則を求めることを目標とする。まず、Jackendoff (1990), Levin & Rappaport (1995) など採用されている語彙概念構造 (Lexical Conceptual Structure, 以下 LCS と略称) に則った語彙記述に基づき、接辞 *-ar* を伴う自動詞の下位分類を提案する。さらに「被影響」の概念を規定する意味関数 *AFFECTED* を導入することによって、動詞の意味構造記述をより効率的に行い、広範囲の現象に統一的な分析を与える可能性を探る。以下では、分析対象とする一連の非動作主主語構文を例示し問題の所在を明らかにしておく。

本稿では、(4) のような自他交替現象を取り上げる。

- (4) a. 客が受付係に貴重品を預けた。(影山 (1997))  
b. 受付係が客から貴重品を預かった。(ibid.)

(4b) の「預かる」は、「閉まる」(= 1b), 「伝わる」(= 2b) と同じ接辞 *-ar* でマークされ、形態的には、(1), (2) と全く並行するような自他の対応を示すように見える。しかし「預

かる」の文法上の主語は、他動詞文において「ニ格」でマークされる着点 (recipient) 役割を担う間接目的語 (= 受付係) に対応するという点に違いがある。

- (5) a. 受付係が客から貴重品を預かった。(= 4 b)  
b. \*貴重品が客から受付係に預かった。

同じ3項動詞でも「伝わる」は(5 a)のような着点主語を取ることができない。

- (6) a. 試験の結果が学生に伝わった。(= 2 b)  
b. \*学生が試験の結果を伝わった。

この点で「預かる」はいわゆる「間接受動文」(7 b)と類似している。

- (7) a. 貴重品が(客から／によって)受付係に預けられた。= **直接受動文**  
b. 受付係が(客から／によって)貴重品を預けられた。= **間接受動文**

つまり、「預かる」は自動詞形接辞 *-ar* を伴いながら、依然として「ヲ格」でマークされる対象 (theme) 目的語 (= 貴重品) を取る点では他動詞構造を残しているのである。しかし、この「ヲ格」目的語は受動化されないという点で、対応する他動詞「預ける」の目的語とは性質が異なる。

- (8) a. 客が受付係に貴重品を預けた。(= 4 a)  
b. 貴重品が(客から／によって)受付係に預けられた。  
= (4 a) の受動化。

- (9) a. 受付係が客から貴重品を預かった。(= 4 b)  
b. \*貴重品が(受付係によって)客から預けられた。  
= (4 b) の受動化。

「預かる」は他動詞構造をもっているように見えても、3項動詞「預ける」とは全く別個の語彙項目をもつことが予測される。

以上をまとめると、次の3点に説明を与えることが本稿の目的である。

- (10) a. 「預かる」とその他の自動詞「閉まる」／「伝わる」との違い。  
b. 「預かる」文と着点主語を取る間接受動文との類似性。  
c. 「預かる」の「ヲ格」目的語が受動化されない理由。

具体的な議論に先立ち、次節では本稿が仮定する理論的な枠組みを概観する。

## 2 理論の枠組み

### 2.1 動詞の項構造情報に基づくタイプ階層

本稿では、Pollard & Sag (1987, 1994), Sag & Wasow (1999), Gunji (1999) などで仮定、展開されている主辞駆動句構造文法 (Head-driven Phrase Structure Grammar, 以下 HPSG と略称) に立脚した素性構造による動詞の意味記述を行う。さらに動詞のもつ語彙情報は、図 1 のような階層構造をなすと仮定する。ここでは、階層的に下にあるタイプはリンク (枝) をたどって到達できる上位タイプの性質をすべて継承するものであることを前提としている。図 1 は動詞の統語的クラスを項構造の特性を中心に表示したものであるが、ここでの動詞の下位分類は必ずしも単に項の数による自動詞・他動詞といった区別とは対応していないことに注意されたい。*verb* の直下の *nonagentive/agentive* という下位タイプは、外項をもたないもの/もつものに対応する。<sup>3</sup>

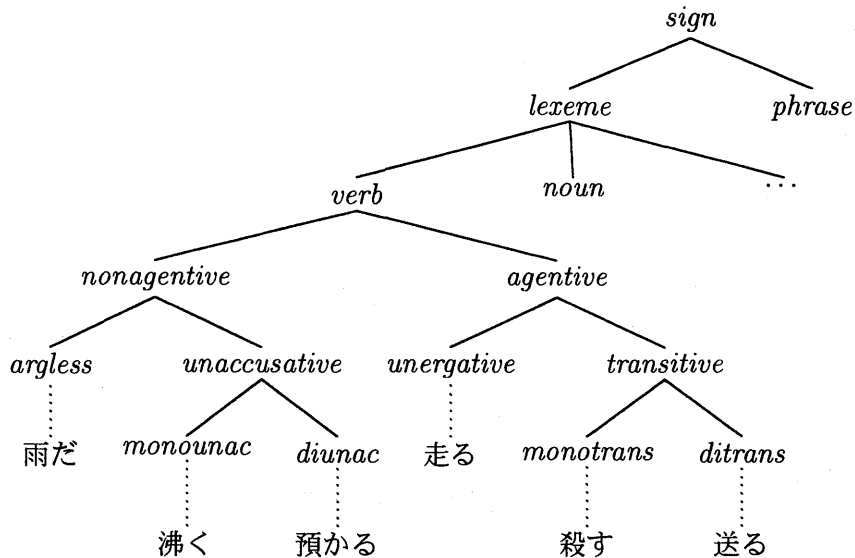


図 1：項構造に基づく統語的クラスの階層関係と例

この図 1 を素性構造であらわしたものが (11) である。本稿では素性構造の中に ARG-ST という素性構造を設け、そのなかに外項と内項にそれぞれ対応する EXT, INT という素性を設定してリストの形で外項と内項の有無を記述する。<sup>4</sup>

- (11) a. 
$$\left[ \begin{array}{c} \text{nonagentive} \\ \text{ARG-ST} \left[ \text{EXT} \langle \rangle \right] \end{array} \right]$$
- b. 
$$\left[ \begin{array}{c} \text{agentive} \\ \text{ARG-ST} \left[ \text{EXT} \langle [ ] \rangle \right] \end{array} \right]$$
1. 
$$\left[ \begin{array}{c} \text{argless} \\ \text{ARG-ST} \left[ \begin{array}{c} \text{EXT} \langle \rangle \\ \text{INT} \langle \rangle \end{array} \right] \end{array} \right]$$
1. 
$$\left[ \begin{array}{c} \text{unergative} \\ \text{ARG-ST} \left[ \begin{array}{c} \text{EXT} \langle [ ] \rangle \\ \text{INT} \langle \rangle \end{array} \right] \end{array} \right]$$
2. 
$$\left[ \begin{array}{c} \text{unaccusative} \\ \text{ARG-ST} \left[ \begin{array}{c} \text{EXT} \langle \rangle \\ \text{INT} \langle [ ], \dots \rangle \end{array} \right] \end{array} \right]$$
2. 
$$\left[ \begin{array}{c} \text{transitive} \\ \text{ARG-ST} \left[ \begin{array}{c} \text{EXT} \langle [ ] \rangle \\ \text{INT} \langle [ ], \dots \rangle \end{array} \right] \end{array} \right]$$
- (i) 
$$\left[ \begin{array}{c} \text{monounac} \\ \text{ARG-ST} \left[ \begin{array}{c} \text{EXT} \langle \rangle \\ \text{INT} \langle [ ] \rangle \end{array} \right] \end{array} \right]$$
- (i) 
$$\left[ \begin{array}{c} \text{monotrans} \\ \text{ARG-ST} \left[ \begin{array}{c} \text{EXT} \langle [ ] \rangle \\ \text{INT} \langle [ ] \rangle \end{array} \right] \end{array} \right]$$
- (ii) 
$$\left[ \begin{array}{c} \text{diunac} \\ \text{ARG-ST} \left[ \begin{array}{c} \text{EXT} \langle \rangle \\ \text{INT} \langle [ ] [ ] \rangle \end{array} \right] \end{array} \right]$$
- (ii) 
$$\left[ \begin{array}{c} \text{ditrans} \\ \text{ARG-ST} \left[ \begin{array}{c} \text{EXT} \langle [ ] \rangle \\ \text{INT} \langle [ ], [ ] \rangle \end{array} \right] \end{array} \right]$$

例えば、図1の「殺す」のような他動詞は *transitive* のクラスに属する。このクラス自体は、*agentive* (=外項をもつもの) の下位クラスにあたり、かつ「内項をもつ」という指定を受け。つまり、*transitive* は、上位クラスの *agentive* のもつ ARG-ST の情報と自分の ARG-ST の情報の矛盾しない部分を融合 (すなわち単一化) したものを ARG-ST の情報としてもつこととなり、結局 *transitive* は、外項を1つと、内項を1つ以上もつクラスであることが自然に導かれる。こうして得られる4種のクラス (*argless*, *unaccusative*, *unergative*, *transitive*) の項構造を図式的にまとめたものが表1である。

表1：動詞の項構造とクラス

外項 内項	なし		あり	
なし	<i>argless</i>		<i>unergative</i>	
あり	<i>unaccusative</i>		<i>transitive</i>	
	1つ	2つ	1つ	2つ
	<i>monounac</i>	<i>diunac</i>	<i>monounac</i>	<i>diunac</i>

## 2.2 項構造と下位範疇化素性

さらに、Perlmutter (1978), Burzio (1986), Grimshaw (1990) などに従い、項構造と下位範疇化素性との間に、動詞の項の斜格性 (obliqueness) に応じて、(12a, b) のような制約が存在すると仮定する。

- (12) a. ARG-STにおいて外項をもたない語においては、内項のもっとも斜格性 (obliqueness) が低い項が主語 (SUBJ) と対応付けられる。主語と対応付けられない項は目的語 (COMPS) と対応付けられる。

$$\left[ \begin{array}{l} \text{VAL} \\ \text{ARG-ST} \end{array} \left[ \begin{array}{l} \text{SUBJ} \quad [1] \\ \text{COMPS} \quad [2] \\ \text{INT} \quad [1 \oplus 2] \end{array} \right] \right]$$

※ここで $\oplus$ は2つのリストを連結する演算子である。

- b. ARG-STにおいて外項をもつ語においては、外項が主語に、内項が目的語に対応付けられる。

$$\left[ \begin{array}{l} \text{VAL} \\ \text{ARG-ST} \end{array} \left[ \begin{array}{l} \text{SUBJ} \quad [1] \\ \text{COMPS} \quad [2] \\ \text{EXT} \quad [1] \\ \text{INT} \quad [2] \end{array} \right] \right]$$

一般に外項の方が内項より斜格性が低いと考えれば、(12) は、「斜格性の低い順に主語と対応付けられる制約」ということになり、動詞のタイプと項構造を表示すれば下位範疇化素性は自然に定まる。

## 2.3 語彙概念構造 (LCS)

既に冒頭で触れたとおり、本稿ではLCSに則った動詞の意味記述を行う。LCSによる動詞の意味記述では、それ以上具体化されない第1義的要素としての意味関数を用いるため、多くの動詞を意味的な同値クラスに分類し、意味の同値類をくくり出すことができるという利点がある。具体的に以下の7つの関数を仮定する。

- (13) a. 意図性 (VOL) : [VOL ([1], [2])]  
 b. 使役 (CAUSE) : [CAUSE ([1], [2])]  
 c. 受動 (AFFECTED) : [AFFECTED ([1], [2])]  
 d. 状態変化 (BECOME) : [BECOME ([1])]  
 e. 状態 (BE) : [BE ([1], [at [2]])]  
 f. 移動 (MOVE) : [MOVE ([1], [path [2]])]  
 g. 働きかけ (APPLY) : [APPLY ([1], [2])]

(13a)のVOLは意図性をもつ個体とそれによって意図的に行われる事象との関係を規定し、(13b)のCAUSEは2つの事象間の因果関係を規定する。さらに本稿では「受動的に影響を被る個体とそれに影響を与える事象との関係」に影響を被る個体の視点から規定する関数としてAFFECTED (13c)を仮定する。<sup>5</sup> これは従来の研究において様々なかたちで言及されてきた「被

影響」の概念（‘affectedness’）を LCS 上の関数として新たに導入したもので、(13b) の CAUSE と反対のベクトルをもつ。(13a-c) はいずれも事象間、または事象と個体との関係を規定するものである。一方、個体を項として取り、その状態変化、状態、移動を規定する関数として BECOME, BE, MOVE (13d-f)、さらに個体から個体への働きかけを規定する APPLY (13g) を仮定する。個体の意図性を規定する関数は VOL であり、この APPLY 自体は意図性とは独立した概念である。

したがって、意図的に働きかけ行為を行う動作主とその働きかけを受けて状態変化を被る対象とが関わる他動詞（例：「壊す」など）は、次のような LCS の指定を受ける。

$$(14) \quad \left[ \begin{array}{l} \text{monotrans} \\ \text{ARG-ST} \quad \left[ \begin{array}{l} \text{EXT} \langle [1] : [3] \rangle \\ \text{INT} \langle [2] : [4] \rangle \end{array} \right] \\ \text{LCS} \quad [ \text{VOL} ([3], [ \text{CAUSE} ([ \text{VOL} ([3], [ \text{APPLY} ([3], [5]) ])], [ \text{BECOME} ([ \text{BE} ([4], [ \text{at} ([6]) ])] ) ] ) ] ) ] \end{array} \right]$$

ここで  $\langle [1] : [3] \rangle$  といった表記は外項である [1] の意味論的な値が [3] であることをあらわす。つまり (14) の LCS は、外項  $\langle [1] \rangle$  の意味論的な値  $[3]$  が何らかの対象  $[5]$  に意図的に働きかけ、<sup>6</sup> 内項  $\langle [2] \rangle$  の意味論的な値  $[4]$  の状態が [6] へと変化するという事象を規定する。

## 2.4 事象構造と主事象

さらに本稿では、Pustejovsky (1995) に従い、LCS が複数の事象から構成され、そのどちらか一方に焦点があたっている場合、それが「主事象」(head event) として語彙的に指定され、語彙情報の一部として記載されていると仮定する（以下、主事象の指定を下線によって示す）。主事象の指定は、(15) のように、ある特定の副詞との共起関係をみることで確認することができる。

- (15) a. 健が一時的に家具を部屋から出した。  
b. \*健が一時的に家具を部屋から運んだ。

副詞「一時的に」は (15a) の「出した」とのみ共起可能で、「家具が部屋の外にある」という結果状態の継続時間をあらわすことができる。これは「出す」では結果事象に焦点が置かれているのに対し、「運ぶ」にはそのような指定がないことを反映するものと考えることができる。したがって「出す」と「運ぶ」の LCS はそれぞれ (16a, b) のように指定されていると予測される。

- (16) a. 「出す」の LCS:  $[ \text{VOL} ([3], [ \text{CAUSE} ([ \text{VOL} ([3], [ \text{APPLY} ([3], [4]) ])], [ \text{BECOME} ([ \text{BE} ([4], \text{OUT}) ])] ) ] ) ]$   
b. 「運ぶ」の LCS:  $[ \text{VOL} ([3], [ \text{CAUSE} ([ \text{VOL} ([3], [ \text{APPLY} ([3], [4]) ])], [ \text{BECOME} ([ \text{BE} ([4], \text{OUT}) ])] ) ] ) ]$



以下ではこれらの理論的背景に基づき、(10) の課題を順に検討して解決案を提示していく。

### 3 着点主語構文

#### 3.1 「預ける」／「預かる」交替

まず「預かる」とその他の自動詞「閉まる」／「伝わる」との違いから考察しよう。他動詞「閉める」(= 1 a, 17a として再掲)と3項動詞「伝える」(= 2 a, 18a として再掲)はそれぞれ (17b), (18b) のような語彙情報をもつと仮定する。

- (17) a. 健が 窓を 閉めた。

[3] [4]

- b. 「閉める」

$$\left[ \begin{array}{l} \text{monotrans} \\ \text{ARG-ST} \left[ \begin{array}{l} \text{EXT} \langle [1] : [3] \rangle \\ \text{INT} \langle [2] : [4] \rangle \end{array} \right] \\ \text{LCS} \quad [ \text{VOL} ([3], [ \text{CAUSE} ([ \text{VOL} ([3], [ \text{APPLY} ([3], [4]) ]], [ \text{BECOME} ([ \text{BE} ([4], \text{CLOSED}) ])] ) ] ) ] \end{array} \right]$$

- (18) a. 教授が 学生に 試験の結果を 伝えた。

[4] [6] [5]

- b. 「伝える」

$$\left[ \begin{array}{l} \text{ditrans} \\ \text{ARG-ST} \left[ \begin{array}{l} \text{EXT} \langle [1] : [4] \rangle \\ \text{INT} \langle [2] : [5], [3] : [6] \rangle \end{array} \right] \\ \text{LCS} \quad [ \text{VOL} ([4], [ \text{CAUSE} ([ \text{VOL} ([4], [ \text{APPLY} ([4], [5]) ]], [ \text{BECOME} ([ \text{BE} ([5], [ \text{at WITH} ([6]) ] \text{FROM} ([4]) ])] ) ] ) ] \end{array} \right]$$

(17b), (18b) では、いずれも動作主 (健: [3], 教授: [4]) による意図的な動作をあらわし、その動作が対象役割を担う目的語 (窓: [4], 試験の結果: [5]) の状態変化や場所変化を引き起こす関係が指定される。一方、対応する自動詞「閉まる」(= 1 b, 19a として再掲)「伝わる」(= 2 b, 20a として再掲)については (19b), (20b) の意味構造を仮定する。

- (19) a. 窓が 閉まった。

[4]

- b. 「閉まる」

$$\left[ \begin{array}{l} \text{monounac} \\ \text{ARG-ST} \left[ \begin{array}{l} \text{EXT} \langle \rangle \\ \text{INT} \langle [2] : [4] \rangle \end{array} \right] \\ \text{LCS} \quad [ \text{CAUSE} ([ \text{APPLY} ([3], [4]) ]], [ \text{BECOME} ([ \text{BE} ([4], \text{CLOSED}) ])] \end{array} \right]$$

- (20) a. 試験の結果が 学生に 伝わった。

[5]

[6]

- b. 「伝わる」

<i>diunac</i>	
ARG-ST	<div> <div>EXT &lt; &gt;</div> <div>INT &lt; [2] : [5], [3] : [6] &gt;</div> </div>
LCS	[ CAUSE ([APPLY ([4], [5])], [BECOME ([BE ([5], [at WITH ([6])]) (FROM ([4]))])]) ] ]

影山 (1996) では「脱使役化」と呼ばれているように、これらの自動詞用法では、動作主 (VOL の第 1 項) が抑制 (あるいは降格) され文主語として具現しなくなる点に他動詞用法との違いがある。本稿では、この違いが主事象の指定によって生じると仮定する。つまり、接辞 *-ar* の付加に伴って結果事象のほうに焦点が置かれ、他動詞用法においては未指定であった主事象が指定されると考える。Pustejovsky (1995: 191) に従い「主事象に関わる項だけが表層構造において義務的に具現化しなければならない」とすると、結果事象の項 (窓: [4], 試験の結果: [5] と学生: [6]) だけが項構造への入力となり内項に結びつくことになる。

以上の仮説の妥当性は、修飾要素に与えられる解釈をみることで確認される。

- (21) a. 教授がすばやく試験の結果を学生に伝えた。

- b. 教授がようやく試験の結果を学生に伝えた。

主事象が未指定である他動詞用法は、原因事象、結果事象のいずれもが主事象となり得る可能性を残すはずである。実際、(21a) の副詞「すばやく」は、動作主が活動を開始する際の様態を修飾するため、VOL 関数を含む原因事象によって認可されると考えられるのに対し、(21b) の副詞「ようやく」は、結果事象に言及する。Pustejovsky (1995) が観察しているように、特定の事象に言及する副詞要素の認可が主事象の指定と対応しているとなると、(21a, b) がいずれも容認されるという事実は「伝える」の意味構造において主事象が未指定であることを反映するものと考えられる。

一方、もし (20b) で仮定した「伝わる」の意味構造が正しければ、「伝わる」は結果事象志向の副詞「ようやく」だけを認可することが予測されるが、実際、(22a) が容認される。

- (22) a. 試験の結果がようやく学生に伝わった。

- b. 試験の結果がすばやく学生に伝わった。

ただし、(22b) のように、副詞「すばやく」も「伝わる」と共起するよう見える点に注意が必要である。しかし、ここで与えられる解釈は先の (21a) とは異なり、動作主の活動様態ではなく、むしろ結果事象 (つまり情報の場所変化) が起こるまでにかかった時間の長さと言

及するものになっている。この違いも、ここで仮定している主事象の指定から正しく予測されるものである。

さて、問題の「預ける」と「預かる」の意味構造に移ろう。

- (23) a. 客が 受付係に 貴重品を 預けた。(= 4 a)

[4] [6] [5]

- b. 「預ける」

<i>ditrans</i>	
ARG-ST	$\left[ \begin{array}{l} \text{EXT} \langle [1] : [4] \rangle \\ \text{INT} \langle [2] : [5], [3] : [6] \rangle \end{array} \right]$
LCS	$[ \text{VOL} ([4], [\text{CAUSE} ([\text{VOL} ([4], [\text{APPLY} ([4], [5])]), [\text{BECOME} ([\text{BE} [5], [\text{at WITH} ([6])] (\text{FROM} ([4])])])])])]) ]$

- (24) a. 受付係が 客から 貴重品を 預かった。(= 4 b)

[6] [4] [5]

- b. 「預かる」

<i>diunac</i>	
ARG-ST	$\left[ \begin{array}{l} \text{EXT} \langle \rangle \\ \text{INT} \langle [2] : [6], [3] : [5] \rangle \end{array} \right]$
LCS	$[ \text{AFFECTED} ([6], (\text{BECOME} ([\text{BE} ([5], \text{at WITH} ([6])] (\text{FROM} ([4])])])]) ]$

ここでは、「預ける」／「預かる」交替が、「伝える」／「伝わる」交替のような主事象の指定によるものではなく、CAUSE から AFFECTED への関数交替によるものと提案する。「預ける」の意味構造 (23b) は、動作主 (客: [4]) が対象 (貴重品: [5]) に働きかけ、対象の所有権が動作主から着点 (受付係: [6]) へと移動することをあらわす。一方、「預かる」の意味構造 (24 b) では、対象 ([5]) の所有権の移動という事象によって着点 ([6]) が影響を被るという関係が着点の視点から規定される。ここで着点は直接動作を受けるのではなく、対象の所有権をもつようになるかたちで、間接的に影響を被る関係が成立している。ここで、AFFECTED の第 1 項である被影響者 (‘affectee’: [6]) のほうがより斜格性が低いと仮定すれば、「預かる」が着点主語を要求する理由が説明される。また、その結果、着点よりも (相対的に) 斜格性が高い対象 ([5]) がもう 1 つの内項に結びつけられると考えることにより「ヲ格」目的語が具現するという特性が導かれる。このように、接辞 *-ar* の付加による動詞の自他交替に (1) 主事象指定型 (「閉まる」、「伝わる」タイプ) と (2) 関数交替型 (「預かる」タイプ) の下位分類を設けることにより、「預かる」とその他の自動詞との違いを適切に分析することができる。

### 3.2 「教える」／「教わる」交替

ここで問題となるのは、前節で提案した「預かる」の意味構造がどの程度の一般性をもつも

のなのかという点である。そこで、ここでは「預ける」「預かる」の交替と基本的には非常によく似ている一方、微妙に違ったふるまいを見せる「教える」と「教わる」の対をとりあげる。

- (25) a. 健が奈緒美に英語を教えた。  
b. 奈緒美が健に／から英語を教わった。

「教える」「教わる」はともに「ヲ格」でマークされる対象目的語(=英語)の移動をあらわし、かつ、接辞 *-ar* が付加された「教わる」が依然として「ヲ格」目的語を伴う点で「預かる」と並行する。しかし両者のふるまいは完全に並行するわけではない。

- (26) a. \*健が奈緒美に鍵を預けたが、奈緒美はその鍵を見たことがなかった。(郡司, 私信)  
b. \*奈緒美が健から鍵を預かったが、奈緒美はその鍵を見たことがなかった。
- (27) a. 健が奈緒美に鍵を預けたが、奈緒美はその鍵を持っていなかった。  
b. 奈緒美が健から鍵を預かったが、奈緒美はその鍵を持っていなかった。

(26) の文はいずれも矛盾する。さらに (27) の接続助詞「が」以下の文は「奈緒美がその時に健から預かっている鍵を携帯しているかどうか」という解釈が必須である。つまり「預ける」「預かる」という動詞はともに、単に対象(=鍵)の移動だけでなく、その場所変化、つまり所有者の変化までを含意する。この意味特性は、すでに見たように、(23b), (24b) で提案した動詞の意味構造はいずれも、結果事象のなかに、状態変化をあらわす BECOME 関数をもつと仮定することで予測することができる。つぎの例も同じ点を反映するものである。

- (28) a. 健が奈緒美に鍵を預けたが、奈緒美はその鍵をなくしてしまった。  
b. 奈緒美が健から鍵を預かったが、奈緒美はその鍵をなくしてしまった。

所有していなければ、「なくす」ことはできない。したがって、(28a, b) が矛盾を生じることなく容認可能であることは「預ける」「預かる」がその意味情報の一部として所有権の移動を含意していることを反映するものと考えられる。

一方、「教える」「教わる」は、こういった含意関係を持たないようである。

- (29) a. 健が奈緒美に英語を教えたが、奈緒美は英語がわからなかった。  
b. 奈緒美が健から英語を教わったが、奈緒美は英語がわからなかった。

母語話者の多く(少なくとも筆者の調査した範囲で)は(29a, b)を適格と判断している。これは「教える」「教わる」が対象(=英語)の場所変化を必ずしも含意しないことを反映す

る。また、(30a, b) が容認されることもこれも同じ理由によるものと考えられる。

- (30) a. 健が奈緒美に英語を教えたが、奈緒美は英語を忘れてしまった。  
b. 奈緒美が健から英語を教わったが、奈緒美は英語を忘れてしまった。

そこで、「教える」「教わる」については (31a, b) のような意味構造を仮定する。

- (31) a. 「教える」
- |        |                |   |
|--------|----------------|---|
| [      | <i>ditrans</i> | ]   |
| ARG-ST | [              | EXT <[1] : [4]><br>INT <[2] : [5], [3] : [6]>   |
| LCS    | [              | VOL ([4], [CAUSE ([VOL ([4], [APPLY ([4], [5])])], [MOVE ([5], [path FROM ([4]) TO ([6])])])])] |
|        | ]              |   |
- b. 「教わる」
- |        |               |   |
|--------|---------------|---|
| [      | <i>diunac</i> | ]   |
| ARG-ST | [             | EXT < ><br>INT <[2] : [6], [3] : [5]>                     |
| LCS    | [             | AFFECTED ([6], [MOVE ([5], [path FROM ([4]) TO ([6])])])] |
|        | ]             |   |

「教える」／「教わる」交替は関数交替型であるという点では「預ける」／「預かる」交替と同じである。ただし、ここでは (31a) の結果事象、(31b) の AFFECTED の第 2 項に埋め込まれた関数が BECOME ではなく MOVE である点に違いがある。このことによって「教える」の意味構造では、動作者の働きかけが着点への対象移動は引き起こしても、その対象が（少なくともある一定期間）着点によって所有される（着点に存在するようになる）ことまでは含意しないことが捉えられる。一方、(31b) においても結果含意がないぶん AFFECTED 関数の第 1 項である着点が被る影響もそれだけ間接的なものとなることを予測する。

BECOME が telic な事象を MOVE が atelic な事象に対応するというアスペクト特性の違いは広く観察されているが、もしここで仮定する意味構造が正しければ、「預ける」「預かる」と「教える」「教わる」にもこういったアスペクト特性の違いがあることが予測される。実際、以下の例における時間副詞「一時間」にそれぞれ異なる解釈が与えられることは、本稿の提案の妥当性を支持するものと言える。

- (32) a. 客が受付係に貴重品を一時間預けた。  
b. 受付係が客から貴重品を一時間預かった。

- (33) a. 健が奈緒美に英語を一時間教えた。  
b. 奈緒美が健から英語を一時間教わった。

(32a, b) では、副詞「一時間」が、貴重品が受付係の管轄下にあるという結果状態の継続期間の長さを修飾する。一方、(33a, b) では、健が講議していた期間が「一時間」であったという解釈しかできず、奈緒美が英語を覚えていた状態が「一時間」という解釈は成り立たない。以上、「教える」／「教わる」交替についても関数交替型の分析を適用することにより、これらの動詞の意味特性、格マーカーにかかる制約、さらにアスペクト特性が自然なかたちで導かれることを述べた。次節では、「反動作主主語 (anti-agent subject)」を取る動詞「見つかる」を取り上げ、そこで観察される一連の意味特性や項の具現にかかる制約もまた、関数 AFFECTED を仮定することによって自然に説明されることを論じる。

## 4 反動作主主語構文

### 4.1 「見つける」／「見つかる」交替

「見つかる」(=34b) は、対応する「見つける」(=34a) の「ヲ格」目的語を主語に取るという点では、「閉まる」「伝わる」タイプの動詞に類似するように見える。

- (34) a. 先生が家出した学生を見つけた。(杉本 1991)  
b. 家出した学生が見つかった。(ibid.)

ところが、「見つかる」は「ニ格」でマークされた動作主の具現を許すという違いがある。

- (35) a. \*窓が健にしまった。  
b. \*試験の結果が教授に学生に伝わった。(教授によって／からであれば可能)  
c. 家出した学生が先生に見つかった。(杉本 1991)

さらに、(35c) のような「ニ格」動作主が具現化する場合には、つぎのような制約がはたらくことが杉本 (1991) において観察されている。

1. 「見つかる」のガ格主語は人間でなくてはならない。  
(36) a. 健がボールを見つけた。  
b. ボールが見つかった。  
c. \*ボールが健に見つかった。(cf. (35c))
2. 「ガ格」主語の意に反してという被害の解釈が生じる。

- (37) a. 遭難した男性が見つかった。(杉本 1991)  
 b. #遭難した男性が捜索隊に見つかった。(ibid.)<sup>7</sup>

しかし、杉本 (1991) ではそれ以上の原理的な説明は与えられていない。本稿では「見つける」／「見つかる」交替もまた関数交替型であると仮定することによりこれらの現象が適切に予測、説明されることを示す。具体的には、(34a, b) の「見つける」「見つかる」がそれぞれ (38a, b) の意味構造をもつと仮定する。

- (38) a. 「見つける」

<i>monotrans</i>					
ARG-ST	<table> <tr> <td>EXT</td><td>&lt;[1] : [3]&gt;</td></tr> <tr> <td>INT</td><td>&lt;[2] : [4]&gt;</td></tr> </table>	EXT	<[1] : [3]>	INT	<[2] : [4]>
EXT	<[1] : [3]>				
INT	<[2] : [4]>				
LCS	[VOL ([3], [CAUSE ([VOL ([3], [APPLY ([3], [5])]), [BECOME ([4, FOUND])])])]]]				

- b. 「見つかる」

<i>monounac</i>					
ARG-ST	<table> <tr> <td>EXT</td><td>&lt; &gt;</td></tr> <tr> <td>INT</td><td>&lt;[2] : [4]&gt;</td></tr> </table>	EXT	< >	INT	<[2] : [4]>
EXT	< >				
INT	<[2] : [4]>				
LCS	[AFFECTED ([6], [BECOME ([BE ([4], FOUND)])])] ]				

ここで「見つかる」(38b) は、純粋な非対格自動詞としてタイプ指定され、見つけられた被動者、あるいは対象である ‘findee’ (= [4]) が内項に結びつけられると仮定する。一方、AFFECTED 関数の第 1 項、つまり対象の発見という事象から間接的に影響を受ける個体 (= [6]) は、語用論的に同定される要素であり、必ずしも統語上は具現しないと仮定する。このような ‘affectee’ が統語的に具現する場合には、つぎの (39) のように文の主題 (トピック) として導入される。

- (39) a. 健はボールが見つかった。  
 b. 奈緒美は財布が見つかった。

つまり「見つかる」の意味構造は AFFECTED 関数をもつという点で「閉まる」「伝わる」などの典型的な非対格自動詞とは異なる。実際、次の (40a) の例は、(41) のように健と窓との間に何らかの特別の関係が読み込まれる場合と比べて容認度が落ちるのに対して、「見つかる」(40b) はそのような制約なしに充分容認されるという違いがある。このようなコントラストも上記のような意味構造の違いを仮定することで自然に説明される。

- (40) a. ??健は、窓が閉まった。  
b. 健は、ボールが見つかった。

(41) 健は、こわれていた彼の家の窓がようやく閉まった。

#### 4.2 「見つかる」の他動詞用法と被害の解釈のメカニズム

さて、つぎに「二格」動作主の具現化と「被害」の解釈の相関について考察する。まず、「見つかる」には、つぎのような他動詞用法があることに注意されたい。

(42) 健が先生に {隠し持っていたタバコ／カンニング／つまみ食い} を見つかった。

ここでも「預かる」の場合と同様、接辞 *-ar* が付加されたあとも「ヲ格」目的語があらわれ、他動詞のような構造が維持されている。しかし、この例では「二格」でマークされる ‘finder’ (=先生) が強く動作主性を維持しているように見える点に違いがある。Tsujimura (1996) などで指摘されているように、前置詞句が内在的な (すなわち、役割に関してより限定された) 意味をもつのに対し、格マーカーを伴う要素の役割はむしろ動詞の意味構造内で決定されるとすると、以下の (43) のコントラストは、対応する他動詞の動作主主語が、*-ar* 接辞が付加されたあと、その動作主性をどの程度維持しているか、その度合いに対応したものと考えることができる。

- (43) a. 健が奈緒美から／\*に鍵を預かった。  
b. 健が奈緒美から／に英語を教わった。  
c. 健が先生\*から／にタバコを見つかった。

例	前置詞／格マーカーの容認度	動作主性の度合い
「預かる」(43a)	前置詞のみ容認	「起点」性が高い。
「教わる」(43b)	両方を容認	「起点」性と「動作主」性が共存。
「見つかる」(43c)	格マーカーのみ容認	「動作主」性が高い。

(42) のような「ヲ格」目的語を伴う「見つかる」の他動詞用法において動作主としての ‘finder’ が存在することはつぎのような対比からも明らかである。

- (44) a. 健はタバコが見つかった。(=38b : *monounaccusative* タイプの「見つかる」)  
b. 健はタバコを見つかった。

(44a) は、健と「タバコの出現」という事象との関係の中立的な記述であり、タバコの発見者である ‘finder’ は未指定である (健自身でも、そうでなくてもよい)。一方、「ヲ格」を伴う



そこで、本稿では「見つかる」の下位タイプに *diunaccusative* タイプが存在し、つぎのような意味構造をもつと仮定する。

<i>diunac</i>	
ARG-ST	$\left[ \begin{array}{l} \text{EXT} < > \\ \text{INT} < \boxed{2} : \boxed{4}, \boxed{3} : \boxed{8} > \end{array} \right]$
LCS	[ AFFECTED ( [4, 8] [VOL ( [5], [CAUSE ( ([VOL ( [5], APPLY ( [5], [6] ) )], [BECOME ( ([BE ( [7], FOUND ) ) ] ) ] ) ] ) ] ) ] ]

(46) a. タバコが見つかった。—\*誰が?  
b. タバコを見つけた。—誰が?

ここで (45) のような意味構造をもつ「見つかる」の用法 (42) では、常に被害の解釈が要求される点に注意されたい。つぎの (47a, b) は、いずれも健が被害を被る解釈が義務的であり、さらに主語が統語的に具現しない (47c) においても潜在的に主語にあたる存在が想定され、かつその主語が被害を被るという解釈が要求される。

- (47) a. 健が先生にタバコを見つけた。  
 b. 健がタバコを見つけた。  
 c. タバコを見つけた。

これらの例に対して一律に被害の解釈が与えられるということは、(45) の *diunac* タイプの「見つかる」が潜在的に「被害」の解釈を与える意味構造を備えていることの反映であると考えてもよいだろう。実際、杉本（1991）において指摘されたように、(38b) の *monounac* タイプの「見つかる」も「二格」動作主が具現する場合には被害の解釈が与えられるのである。

- (48) a. 家出した学生が先生に見つけた。(=35c)  
 b. \*ボールが健に見つけた。(=38c)

そこで、(48a) のように、二格動作主が具現化する場合の *monounac* タイプの「見つかる」の意味構造では、さらにつぎのように指定がすすむと仮定する。

- (49) (「二格」動作主と共起した場合の)「見つかる」
- |   |   |
|---|---|
| $\left[ \begin{array}{l} monounac \\ ARG-ST \\ LCS \end{array} \right]$ | $\left[ \begin{array}{l} EXT \langle \rangle \\ INT \langle [2] : [4] \rangle \\ [AFFECTED ([6], [8] [VOL ([5], [CAUSE ([VOL ([5], [APPLY ([5], [7])]), [BECOME ([BE ([4], FOUND)])])])])])]]] \end{array} \right]$ |
|---|---|

ここでは、単純事象から構成されていた AFFECTED 関数の第2項に VOL が導入され複雑構造を形成すると仮定しているが、注目されるのは、(49) と (45) で仮定した *diunac* タイプの意味表示の並行性である。*diunac* タイプの「見つかる」が義務的に「被害」の解釈を伴うことを考えると、「被害」の解釈が、このような AFFECTED 関数の第2項の複雑性と相関していると考えても、不自然ではないだろう。そこで、本論ではつぎの仮説を提案する。

- (50) **仮説1**：被害の解釈は、AFFECTED 関数の第2項に VOL 関数が埋め込まれている時のみ引き起こされる。

本節では「見つける」／「見つかる」交替もまた関数交替型であると提案した。また「見つかる」に *monounac* タイプと *diunac* タイプの下位分類を設定し、さらに後者には常に被害の解釈が伴うことに注目することにより、「二格」動作主の具現化と被害の解釈との相関を示した。

#### 4.3 間接受動文との相関：語から句へ

本稿では、接辞 *-ar* の付加による動詞の自他交替現象を対象に、語レベルの語彙表示における動詞の意味構造分析を提案してきたが、こういった分析を句レベルにまで拡張する可能性について簡単に触れておきたい。紙面の都合上、詳細な議論は割愛するが、ここで注目したいのは接辞 *-(r)are* の付加によって派生されるいわゆる「間接受動文」の現象である。(51a) のような間接受動文の例は、前節で考察してきた *diunac* タイプの「見つかる」の用法と類似している。

- (51) a. 健は先生にタバコを見つけられた。＝間接受動文  
b. 健は先生にタバコを見つけた。＝*diunac* タイプの「見つかる」

そこでまず、間接受身を派生する接辞 *-(r)are* も *AFFECTED* を主関数とするような LCS をもつと仮定する。

- (52) 「られ (間接)」
- $$\left[ \begin{array}{l} \text{morpheme} \\ \text{ARG-ST} \left[ \begin{array}{l} \text{EXT} \langle \rangle \\ \text{INT} \langle \boxed{1} : \boxed{3}, \boxed{2} : \boxed{4} \rangle \end{array} \right] \\ \text{LCS} \quad [ \text{AFFECTED} (\boxed{3}, \boxed{4} [\text{event. ...}]) ] \end{array} \right]$$

接辞 *-(r)are* の意味構造では、外項に結び付けられる被影響者だけが指定されている。一方、*AFFECTED* の第 2 項は未指定で、そこに *-(r)are* が付加される動詞基体の LCS が挿入されると考える。外項は既に指定されているため、動詞基体があらわす事象 (4) がそのまま内項に結びつくとして仮定しておく。間接受身文は「被害の受身」と呼ばれるように、その意味特性のひとつとして被害の解釈を伴うことが指摘されてきた。前節では、被害の解釈が *AFFECTED* の第 2 項への *VOL* の導入によって生じるという仮説をたてたが、もしこの仮説が正しい方向性をもったものであれば、*-(r)are* と結びつく動詞の選択に、次のような制約がはたらいっていることが予測される。

- (53) 制約：間接受動文をつくる形態素 *-(r)are* の意味構造において、*VOL* 関数を欠くような LCS は、*AFFECTED* 関数の第 2 項にあらわれることができない。

もしこの制約が正しいければ、外項を欠くような非対格タイプの動詞は被害の受身をつくり得ないことを予測することになるが、実際、寺村 (1982)、影山 (1993) で指摘されている非文の例は、この制約によって説明することができる。<sup>8</sup>

- (54) a. \*ガラスに割られて怪我をした。(寺村 (1982))<sup>9</sup>  
 b. \*噂に広まられて会社をクビになった。(ibid.)  
 c. \*私はおじいさんに転ばれた。(影山 (1993))

## 5 おわりに

本稿では、「被影響」(‘affectedness’) という概念をキーワードに、非動作主を主語に選ぶような他動詞に関わる現象について考察してきた。具体的には、外項を持たないという意味で非対格性の特徴を備えた他動詞を *diunac* タイプとして分類し、さらにそれらの動詞が AFFECTED 関数によって特徴づけられる意味構造を持つと仮定することで、従来は特殊性ばかりが観察されてきたように見えるような現象に対して、新たな見地から統一的な分析を与える可能性を示した。

実際、本稿で取り上げたつぎのような例は、「受動化できないヲ格目的語」の例としてその特殊性ばかりが強調されてきたように思われる。

- (55) a. 受付係が貴重品を預かった。／\*貴重品が受付係に預けられた。  
 b. 健が先生にタバコを見つけた。／\*タバコが先生に見つかられた。

本稿の分析ではこれらの動詞はいずれも AFFECTED 関数を含む LCS を持つものとして扱われる。つまり、これらの動詞の意味構造は CAUSE とは逆ベクトルの関係を規定し、「利害関係」を軸とした受動的な意味関係をあらわすものとして分析されるのである。そうすると、これらの動詞が、接辞 *-rare* の付加によるいわゆる統語的受動化をうけつけないのは、決して例外的なのではなくこれらの動詞の語彙情報として既に受動的意味関係が規定されているため、それ以外の手段による受動化を適用する必要がないと説明できる。次に類例をあげる。

- (56) a. 木が芽をふいた。／\*芽が木にふかれた。(影山 (1996))  
 b. 健が熱を出した。／\*熱が健に出された。(今泉 (1998))

これらの動詞が、統語的に受動化されないのは次のような一般制約に基づくものと考えられる。

- (57) **仮説 2** : AFFECTED 関数によって特徴づけられる意味構造をもつ動詞は、統語的受動化を受けない。

この他に AFFECTED が関与していると思われるがここでは取りあげられなかった問題としては、「(足を) ぶつける」「(指を) 切る」さらに、野田 (1991 : 219) が指摘している「胃にかいようを作る (=できてしまう、という意味で)」「(異常に気づかず、放置していたために)

馬を殺した」などの非意図的な他動詞用法、慣用句としての「手をこまねく、目をむく、名をあげる、顰蹙を買う」などがある。これらの用法の分析を通して意味関数 AFFECTED の一般化をさらにすすめることが今後の課題である。

また、本稿では意味関数の交替による「受動化」の視点から、動詞の自他交替の現象を取りあげたが、「受動化」と対極にあって、やはり自他交替の現象と密接にかかわるのが「再帰化」である。たとえば、「骨を折る、手を切る」などは、一見したところ、上記の慣用用法と同じく自らの身体の一部を目的語に持っているが、動作主の意図性が関与する点で微妙な違いがある。これらの用法をはじめ、「再帰化」の視点からも分析を行うことによってはじめて自他交替現象の全貌が見えてくるのではないと思われる。この点についても今後の課題としたい。

## 註

1. 接辞 *-ar* による自他交替の詳細な分析については、Jacobsen (1992: 260-261, [Ⅲ類])、影山 (1996: 83-189, 「脱使役化型自動詞化」) などを参照。
2. 野田 (1991) では、「壊す—壊れる」「預ける—預かる」などの、いわゆる自動詞と他動詞の対立を「語根は共有しながらも、限られた動詞にしか現れない「AS」「S」「AR」「R」などの形態によってヴォイスの対立を表すもの (212)」として、**中間的ヴォイス**と呼んでいる。ここでの「中間」とは、いわゆる *-(r)are*, *-(s)ase* という生産的接辞の付加によってマークされる**文法的なヴォイス**と、「勝つ—負ける」「殺す—死ぬ」のように、動詞の形態には反映されないものの純粋に意味的、構文的レベルでヴォイス交替に相当する意味の対立をあらわす**語彙的なヴォイス**との間に位置付けられる関係をあらわし、「文法的ヴォイスほど生産性が高くなく、また語彙的なヴォイスほど個別的ではない (214)」という、自他交替現象の特性を反映している。以下で取り上げる *-ar* の付加による自他交替現象は、この「中間的ヴォイス」にあたる。
3. この階層自体は日本語特有のものではなく普遍的なものであると考えられる。同じような階層構造を用いた分析としては Manning & Sag (1998), Davis (1996), Manning, Sag & Iida (1999), Sag & Wasow (1999) などを参照。また本稿での文法記述モデルについてのより詳細な議論は、郡司 (2000) を参照されたい。図 1 も同左に基づく。
4. 通常非対格動詞は自動詞とされているが、本稿では他動詞のなかにも非対格動詞があると考えている。同様のアプローチについては、今泉 (1998)、郡司 (2000) を参照。
5. ここで採用する「被影響」(‘affectedness’) の概念を LCS 上の関数として導入したのは今泉・郡司 (2000) であるが、この概念自体は Kuroda (1979) で既に言及されており、それに厳密な形式化を与えた研究に、Gunji (1981, 1987, 1994) がある。また、Greenbaum & Quirk (1990)、鷲尾 (1997) など記述的な研究においてもさまざまなかたちで言及されている。
6. (14) において、APPLY の第 2 項が⑤となっているのは、働きかけの対象が必ずしも状態変化を起こす対象とは一致しない場合 (道具を使って遠隔操作する場合など) を考慮にいれたものであるが、殆ど場合は APPLY の第 2 項と BE の第 1 項が同一であるのが自然である。
7. #は文法的には非文ではないが、状況的に奇妙であることを示す。
8. 但し、間接受動文の例としてしばしば引用される「雨に降られる」はあてはまらない。しかし、寺村 (1982: 248)、杉本 (1991: 246) などでは、こういった例がむしろ例外的であることが述べられていることを考慮すると、必ずしも本稿の分析の反例にはならないと思われる。
9. 寺村 (1982) の判断は、? (single question) である。

## 参考文献

- Burzio, L. (1986). *Italian Syntax: A Government-Binding Approach*. Dordrecht: D. Reidel.
- Davis, T. (1996). *Lexical Semantics and Linking in the Hierarchical Lexicon*. Ph. D. dissertation, Stanford University.
- Greenbaum, S. & Quirk, R. (1990). *A Student's Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Grimshaw, J. (1990). *Argument Structure*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Gunji, T. (1981). *A Phrase Structural Analysis of the Japanese Language*. Unpublished M. A. thesis, The Ohio State University.
- Gunji, T. (1987). *Japanese Phrase Structure Grammar*. Dordrecht: Kluwer.
- 郡司隆男 (1994). 『自然言語』. 東京：日本評論社.
- Gunji, T. (1999). On Lexicalist Treatments of Japanese Causatives. In Levine, R. & Green, G. eds., *Readings in Modern Phrase Structure Grammar*. Cambridge: Cambridge University Press, 119-160.
- 郡司隆男 (2000). 「日本語の動詞の形態素とそれに基づくタグ付け」. 郡司隆男編, 『制約に基づく文法の連続量の概念を取り入れた拡張の研究』, 神戸松蔭女子学院大学. 1-25.
- 今泉志奈子 (1998). 「語彙的受動—動詞の意味構造における「被影響」の概念について」. 未公開論文. 大阪大学大学院言語文化研究科.
- Imaizumi, S. (1999). On the Notion of "Affectedness" in the Semantic Structures of Verbs: with Special Reference to Voice Alternation Phenomena in Japanese. Unpublished M. A. thesis, The University of Manchester.
- 今泉志奈子・郡司隆男 (2000). 「語彙的複合における複合事象—「出す」「出る」に見られる使役と受動の役割—」. 郡司隆男編, 『制約に基づく文法の連続量の概念を取り入れた拡張の研究』, 神戸松蔭女子学院大学. 39-65.
- Jackendoff, R. (1990). *Semantic Structure*. Cambridge, Mass: MIT Press.
- Jacobsen, W. M. (1992). *The Transitive Structure of Events in Japanese*. Tokyo: Kurosio Publishers.
- 影山太郎 (1993). 『文法と語形成』. 東京：ひつじ書房.
- 影山太郎 (1996). 『動詞意味論—言語と認知の接点—』. 東京：くろしお出版.
- 影山太郎 (1997). *Transitive Verbs with Unaccusative Structure*. 未公開論文. 関西学院大学.
- Kuroda, S.-Y. (1979). On Japanese Passives. In Bedell, G., Kobayashi, E. & Muraki, M. eds., *Explorations in Linguistics: Papers in Honor of Kazuko Inoue*. Tokyo: Kenkyusha, 305-347.
- Levin, B. & Rappaport Hovav, M. (1995). *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Manning, C. & Sag, I. A. (1998). Dissociations Between Argument Structure and Grammatical Relations. In Webelhuth, G., Koenig, J. P. & Kathol, A. eds., *Lexical and Constructional Aspects of Linguistic Explanation*. Stanford, CA: CSLI Publications.
- Manning, C., Sag, I. A. & Iida, M. (1999). The Lexical Integrity of Japanese Causatives. In Levine, R. & Green, G. eds., *Readings in Modern Phrase Structure Grammar*. Cambridge: Cambridge University Press, 39-79.
- 野田尚史 (1991). 「文法的なヴォイスと語彙的なヴォイスの関係」. 仁田義雄編, 『日本語のヴォイスと他動性』. 東京：くろしお出版, 211-232.
- Perlmutter, D. M. (1978). Impersonal Passives and the Unaccusative Hypothesis. In *Proceedings of the Fourth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, Berkeley Linguistics Society, 157-189.
- Pollard, C. J. & Sag, I. A. (1987). *Information-based Syntax and Semantics, VOL.1: Fundamentals*. Stanford, CA: Stanford University. 郡司隆男訳, 『制約にもとづく統語論と意味論—HPSG 入門』. 東京：産業図書, 1994.
- Pollard, C. J. & Sag, I. A. (1994). *Head-Driven Phrase Structure Grammar*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Pustejovsky, J. (1995). *The Generative Lexicon*. Cambridge, MA: MIT Press.

- Sag, I. A. & Wasow, T. (1999). *Syntactic Theory: A Formal Introduction*. Stanford, CA: CSLI Publications. 郡司 隆男他訳, 『統語論入門上—形式的アプローチ』, 東京: 岩波書店, 2001年刊行予定.
- 杉本武 (1991). 「ニ格をとる自動詞」. 仁田義雄編, 『日本語のヴォイスと他動性』, 東京: くろしお出版, 233-250.
- 寺村秀夫 (1984). 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』, 東京: くろしお出版.
- Tsujimura, N. (1996). *An Introduction to Japanese Linguistics*. Oxford: Blackwell.
- 鷲尾龍一・三原健一 (1997). 『ヴォイスとアスペクト』, 東京: 研究社出版.

## 謝辞

本原は、第6回形態論・レキシコンフォーラム(2000年3月、於:東京大学)での口頭発表に加筆、修正を加えたものである。発表の際に有益なコメントを下された影山太郎、小林英樹、杉岡洋子、竹沢幸一の諸先生方、ならびに MLF (Morphology & Lexicon Forum) のメンバー諸氏、また本稿作成の様々な段階で御指導頂いた群司隆男、春木仁孝、三藤博、由本陽子、Nigel Vincent の諸先生方に感謝する。最後に、KCELS における口頭発表をはじめとする研究発表の場を御提供下さり、常に温かく研究を御支援下さる上紀子先生に厚く御礼申し上げる。言うまでもなく、本稿に含まれる誤りなどはすべて筆者の責任である。

(原稿受理2000年12月20日)